

ボランティアとして一言

オリンピックの大会組織委員会のもとでお金にまつわる実態が表に出てきています。報道によれば、AOKI、KADOKAWA、大広とスポンサーがらみの贈収賄容疑が次々と広がって大会を支えたボランティアの一人として深い失望です。

東京大会が正式に確定してから私はボランティアを決意し少しずつ準備を始めました。まずは外国語の総復習。高校・大学時代に学んだ英語と、現役時代に新聞社の特派員として派遣された中南米の地でゼロから学んだスペイン語でした。このスペイン語については、現場でのたたき上げで身につけたものだったので、学問的にもキチンと系統立てて学んでおきたいと、定年後に南スペインのマラガ大学に1年間留学した経過がありました。



幸いにある程度2言語ができたので私はメディア広報部門に応募。両言語のレベルを証明する書類の提出も求められ希望通りに登録されました。すぐにボランティアの研修会が始まり都内での研修会に3回参加。ところがコロナパンデミックで大会は1年延期され、研修もオンラインに変わりました。そして2年目に大会は開催され

たものの海外からの一般観客はなくなり、都内を中心に来日外国人のアテンドをする「都市ボランティア」の出番はなくなったのです。

「大会ボランティア」は原則的に任務がありましたが、私はメディア・マスコミの世界から東京晴海のオリンピック選手村への配属となったのでした。世界から来日した選手たちと直接触れ合う現場です。自分の任務は宿舎の備品の整備と管理や一階の受付で選手の全ての要望への対応でした。さまざまに状況が変化するなか不安を抱きながら来日しているかもしれない選手が、少しでも安心して実力を発揮できるよう、また日本によい印象を持ち帰国してくれるように私はバスタオルやトイレトペーパーを手渡すときでも、できるだけ選手の国の言葉で声をかけながら真心からの“おもてなし”に努めたのでした。

後ほど交通費として出勤日に対し一律1日千円が支給されました。ありがたいことでしたが、青梅線昭島駅の自宅から晴海の会場まで2時間以上かかる距離からするととても足りない金額ではありました(決して不満を言っているのではなく、他のボランティアスタッフの皆さんの実態を踏まえての記述です)。

それ以上に「私は輝く」とのボランティアのモットーに共感、大会の底辺で微力なりとも貢献できたという充足感を抱いていました。それなのに今、海外でもこの醜い実態がメディアで報道されていると思うとこんな残念なことはありません。

(この要約は9月25日の朝日新聞声欄に掲載されました。エッセイ・コラム欄のページをご覧ください)

